

伊沢エイに関する研究 —ダンス観について—

奥野知加
田川典子

〈研究目的〉

伊沢エイ（1885～1965）は明治43年（1910）姉藤村トヨの経営する東京女子体操音楽学校を卒業し、そのまま坪井玄道の助手として同校に残る。以来、半世紀日本の女子の体育ひとすじに生き、その歴史を築き上げた一人であった。学校体育の、ことにダンスの分野においては、ドイツ留学の成果を生かし自然運動を基盤とする260余の体育ダンス、唱歌遊戯を創作し指導している。本研究は伊沢エイのダンス理念をさぐり、その動きの実際を知ることによって伊沢のダンス観をみようとするものである。

〈研究方法〉

伊沢の著書、日記及び関係資料や文献などを手がかりに留学時代から没年までの伊沢の足跡をたどり、学校体育における活動、業績を知る。また、ダンス作品については著書「体育ダンス」「新学校ダンス」に取り上げられている全作品について、その作品内容を運動の観点より分析し、それぞれに現われる動きの実際を把握する。そのほか、伊沢のいう自然運動や基本運動について、著書「学校ダンス」「師範大学講座第9巻体育舞踊」及び「学校体育指導要綱ダンス編」などから読みとる。以上、総合的な結果より伊沢のダンス観を考察してみる。

〈結果及び考察〉

ドイツ留学時代

大正11年（1922）坪井玄道亡きあと、伊沢は引き続き一人で指導に携わるが、学校ダンスの在り方やその理想とする方向をもとめ、昭和3年（1928）11月ドイツへと出発する。すでに姉トヨは同年5月に渡独しており、ベルリンでは姉妹揃っての研修となる。

伊沢のドイツでの研修は、まずメリーウィグマン舞踊学校の夜学コースで初歩的な基本の動きを研修し、週末にヴィマン学校より講師を招き宿舎にて個人教授をうけている。また、ボーデの体操実施コースを受講すると共にこれも講師を依頼し、ボーデの表現体操について解説書による個人指導を受けている。その他ローエラント学校、メンゼンディーク、カールマイエルなどの体育学校で実技コースを受けている。また、イギリス、フラン

スにも足をのばし体育事情を視察している。当時のドイツはドイツギムナステック連盟設立直後に当り、ボーデ、ラバン、ローエラント、カールマイエル、メンゼンディーク、ギントラーなどが結集しその統一精神のもと、活動を開始していた。そのただ中で姉トヨはそれまでの普通体操の研究に一層の自信を持ち、伊沢は自然運動に共鳴し連日精力的に日程をこなしていた。中でもボーデとヴィグマンについては全力を傾注してその理論と実際を学び取ろうとしていた様子が伊沢の日記に詳しく綴られている。後に、ボーデの表現体操は、伊沢のダンス理念の基ともなり、伊沢の基本運動にはボーデの基本運動のシステムが多く取り入れられていくこととなる。一方メリーウィグマンにも心酔し、当時の日記にヴィグマンの舞踊公演の感想を「観衆にこびる点はひとつもなく、ひたすら芸術に生きて神のような心境であられると推察できた」と記した。「このように美しい表現ができるためには身体の訓練、即ち基本運動が重要なのである。」と加えている。そのほか伊沢の日記から読み取れることは、自然運動の重要性を痛感しその習得に励んだこと、また各学校の殆んどが女性教師であることに驚くと同時に日本の実状をかんがみ、改めて女子の指導者としての強い使命感をいだいてゆく過程などが読み取れる。

帰国後の活動

昭和4年（1929）3月帰国した伊沢は、まず自然運動の普及を念頭に体操音楽学校の授業をはじめ各地での講習会にまた出版活動にと精力的に動きはじめる。しかし硬直的な一斉体操が行なわれていた当時は、この自然運動が奇異に感じられたらしくフニャフニャ体操、フラフラ体操とことごとく拒否され、なかなか受け入れられなかった。しかし解緊運動のむづかしさや、それを体得し律動的に動くことの心地良さが次第に理解されはじめるにつけ、また大谷武一らの助言もあって徐々に見直され実施されるようになっていった。自然運動の普及を目的に帰国直後出版された作品集「体育ダンス」（昭和6年目黒書店）は唱歌遊戯6作品を含む全38作品から成り、作品を通して自然運動の紹介とその基本指導を解説している。この「体育ダンス」に掲載されている全作品について動きの内容を基本運動の観点から分類し、それぞれの作品の構成要素をみてみた。（表1参照）ここでみられる傾向としては、まず振動運動が多きどの作品にも組み込まれていること。緊張運動が極端に少ないことがあげられる。ここで行われている振動運動とは解緊運動も場合によっては弾性運動とも絡みながら一連の動きとして行われており、伊沢は自然運動の体得にはこの振動運動の習得が第一義であるとし、作品の中で強調しているものと考えられる。また緊張運動が極端に少ない

